萱

2021·7

七月集

亀田虎童子

川鳴りの耳許蟬の殻つぶす

蟬の穴むかし覗きし覚えあり

冷奴今も昔もそれなりに

瀧壷を覗く木の枝折れるなよ

木の瘤の大きな沼の初螢

PDF= 俳誌の salon

一輪の今開花せり鉢の百合　東京　加倉井たけ子
新緑の甲斐に訪ねし微笑仏
川またぎ風と戯る鯉のぼり
馥郁たるバラ園にゐて寡黙なる
噴水の飛沫に薔薇の香りたつ

旅果ての花菜あかりの鞆の浦　東京　釜田　敬司
菜の花なかにぽつりと無人駅
新しき茅屋根厚し山若葉
遠き日の子らの輪唱夕蛙
九十九折清水に四肢の癒さるる

糠雨の雫となりぬ藤の房　東京　小島　良子
銃弾の如き花種播きにけり
指折つて数ふ歳月夏蓬
天井の四隅八十八夜なり
音たてて箸を洗へり昭和の日

こんな所に桜ありとは知らざりし　埼玉　関　喜久子
咲きて良し散るも尚よき桜かな
一本の桜一人で見尽くせり
雑木みな芽吹きて我も若返る
芽吹きけり舗道の石の間より

鯉幟ベランダかすり泳ぎをり　東京　菅原　朋子
冬服にブラシをかけて五月風
部屋中に薫風通し深呼吸
里芋の芽を植へてみる大き鉢
猫塚に猫集まりて若楓

一独りきて晒す堤のつばな風　東京　武田　未有
列なせる蟻の殿夕日引く
対すれば完敗の感白牡丹
このところゆるく生きをり傘雨の忌
汗の子のらくがき褒めて無罪とす

散る櫻コロナ感染増えつづく　東京　土田野里子
散り来たる桜一片肩にのる
青き踏み幼子遊ばす広き園
さ緑に風わたり行く躑躅垣
コロナ禍を払拭するか鯉幟

佐保姫の乗り捨て輿か雲ひとつ　千葉　中山　惠子
眉引いて一歩踏み出す五月かな
母も見し歳時記手擦れ麦の秋
メンソール効きしのど飴夏立ちぬ
薔薇ひらき蟄居の日々を照らしけり

PDF= 俳誌の salon

白藤の花弁幽かにゆれあへり　東京　根來　隆元

灯しつぐ聖火のありて新樹かな

夏籠や一点の月かくれなき

うす虹やはたとあひたる古馴染み

夕虹に靴擦れ紅き乙女どち

目借りどき朝より瞼重たくて　茨城　平佐　悦子

海見えるゴルフコースや大南風

若芝や赤子にもある盆のくぼ

人を身に猿の寄リくるこどもの日

風五月パンデミックが止まらない

行く春や接種予約を一番に　東京　ふなかわのりひと

春深しパパ友群るる砂場かな

鶯やビブラートよしシャクリよし

施設から母は医院へ花吹雪

願はくはいつか来る日は花つつじ

リボン巻くバレンタインのチョコレート　東京　松下　道臣

反骨の隠れてをりぬ牡丹の芽

鶯餅つまみあぐとこへこませて

干鱈食む八〇二〇自前の歯

春の月突つ支ひ棒のほしかりし

五葉松ゆ猫下りてくるのどけしや　千葉　光成　敏子

五月晴五百羅漢の空仰ぐ

春風のいまだ冷たき大津川

鶯が鳴く木下音頭読みをれば

アルコールスプレー置かれ甘茶仏

広場横切り大小数多鯉幟　東京　谷田貝順子

若葉風木洩れ日を伝い下校の子

幻の武原はん女の像や楠若葉

目覚むれば薔薇のかをりの闇に満つ

コロナ禍にエールと思ふ大夕焼

PDF= 俳誌の salon

自習室　現代の俳句を読む

小島良子

しんがりの蟻しんがりを楽しみぬ　　中村正幸

角川俳句年鑑二〇二一

その先もまたその先もすすき原　　関　成美

「多磨」六百号

芒原といえば、箱根仙石原や陣馬高原の芒を思い出す。人が大勢入っている筈なのに、芒に隠れて見えない。時々思わぬ処から笑い声が聞こえてきたりする。

掲句は、どこまでも続く芒原である。これは実景であると共に、氏の心象風景なのかも知れない。

「その先もまたその先も」から、人の世の空しさを感じるか、又は眼前の芒の逞しさに充実感を受け取るか、人それぞれと思う。

氏の主宰される「多磨」は、このたび四月号を以て目出度く六百号を迎えられた。目路はるか打ち靡く芒原の生命力にこの喜びを重ねたい。大群落をつくる芒の勢いを我が物として、「多磨」も更なる月日へ進まれることと思う。

秋冷の水に下りたる暮色かな　　成美

秋の暮という概念的な情趣を、一寸違う角度から切り取って、この秋冷の水は心に沁みて動かない。

牧水の酒讃むる歌を筆はじめ　　成美

「白玉の歯にしみとほる秋の夜の酒はしづかに飲むべかりけり　牧水」であろうか。氏が前川佐美雄門で短歌に親しまれた頃がしのばれる。

PDF= 俳誌の salon

冬深し満州の闇よみがへる　　大串　章

「俳句」四月号

戦中の小学校の教室には、黒板の横にアジア州の地図が掲げてあった。楓の葉のような満州、薩摩芋に見える台湾朝鮮半島も日本の統治下にあったので、みな赤く塗られていた。形の面白い面積の広い満州は殊に目を引いた。

当時の小学生は、日本書紀の神武に始まる皇紀の年号のもとに、神国日本の歴史を学び、皇国史観一辺倒の教育を受けていた。堅苦しい時代であった。

掲句の満州にはどうしても引寄せられる。

氏には、

満州の枯野幼き我の立つ　　章

敗戦日引き揚げてきて今があり　　〃

もある。日本は満州事変から日中戦争の泥沼へ入っていったのであるが、茫漠たる彼の地は、寒く、闇は深かったであろう。私事ながら、地図を見る度に黒竜江やウスリー川に囲まれた旧満州を目でなぞってしまう。

満州のペチカ故郷の炬燵かな　　章

日本の敗戦により満州国は消滅した。教室のあの地図は焼却されたろうか。一人一人の心にたたまれた歳月の重さと、時代の変転の激しさを改めて感じとる。

PDF= 俳誌の salon